7. HBs抗原・RIAキット(トラベノール)の基礎的検討

金森 勇雄 服部由美子 松尾 定雄
矢橋 俊丈 吉田 宏 樋口ちづ子
(大垣市民病院・放)
中野 哲 綿引 元 武田 功
小沢 洋 杉山 恵一 (同・消)
佐々木常雄 石口 恒男 (名大・放)

今回われわれは，近年トラベノール社より開発されたHBs抗原RIAキット(試験管固相法)の基礎的検討を行い次のごとくの結論を得た．

1) Incubation条件

1st. imcubationは室温で20時間，2nd. incubationは37°C, 3時間が最も良好なるincubalion条件であった．

2) 洗浄回数

最低2回は必要である．

3) 再現性

同時再現性のC.V.は2.7～33.3%，日差再現性のC.V.は14.8～25.0%の間にあり，低いratioより高ratioに移行するに従い再現性は良好となる傾向が認められた．

4) 希釈曲線

本法は従来法に比し，全体的に高いcut off ratioを示す，非常に良く類似した曲線であった．

以上のごとく，本法は従来法に良く類似したキットであることより，従来法とともに日常の検査に問題なく使用し得るものと考える．

8. HBc抗体測定の意義(第2報)

矢橋 俊丈 松尾 定雄 吉田 宏
樋口ちづ子 金森 勇雄 (大垣市民病院・放)
中野 哲 綿引 元 武田 功
小沢 洋 杉山 恵一 (同・消)
佐々木常雄 石口 恒男 (名大・放)

今回，われわれは522例の各種肝疾患においてHBc抗体の測定を行い，ウィルス肝炎診断におけるHBc抗体の意義を検討し報告する．

(1) 急性肝炎および劇症肝炎ではTotal-HBc抗体測定にIgM-HBc測定を併用したことより以前に比し持続感染との鑑別が明確になり，HBs抗原が消失した時期でもIgM-HBc抗体が検出されることよりHBs陰性B型肝炎と診断される症例が少なくなかった(急性肝炎14.3%，劇症肝炎25.0%)．

(2) 慢性肝疾患ではHBs抗原陰性例で病像が進行するにつれてHBc抗体価が増加する傾向がみられ，B型肝炎ウィルスの関与が示唆された．陽性例でも，わずかながら同様の傾向がみられた．特にASCの30歳代までのHBe抗原フェイズに低抗体価が集中する傾向がみられた．

以上の結果と現在までのHBVマーカーの検討より，HBc抗体測定の意義を認識することは臨床面および今後の検討課題に役立つものと考えられる．

9. RIAにおける標識放射能の管壁附着

吉積 智子 田中 浩美 大西 勝治
榊原 弘之 月田 邦彦 河村 信夫
仙田 宏平 (名古屋第一赤十字病院・放核)

最近開発されたビーズ固相法によるCEA測定用キットを試用して，標識物質が，反応系内でFreeとBoundに分離される以外に比較的多くAssay用チューブの管壁に附着し残留することが判明した．そこで，この残留放射活性がRIA測定での定量値にどのように影響するのか検討した．その結果，ビーズ固相法を利用したRIA (CEA, AFP, T_3U) における標識物質のチューブ管壁への附着は，polystylen製，polypropylen製チューブの材質による差はなかった．検討種目のうちCEAでの附着が最も高い計数率を示した．附着量は血中フリー濃度に関係なく，トータルカウントの0.5%前後を示した．CEA測定値の正常域濃度におけるCV値は，ビーズ直接測定で9%前後に対し，ルーチン測定では14%～30%と大きな変動を示した．以上の検討結果から，ビーズ固相法によるRIAの内，CEAのように低濃度域で有意性を判定する検査は精度管理上，ビーズを直接測定することが望ましいと考える．標識物質の管壁附着の機序に関してはさらに検討する必要がある．

Presented by Medical*Online